

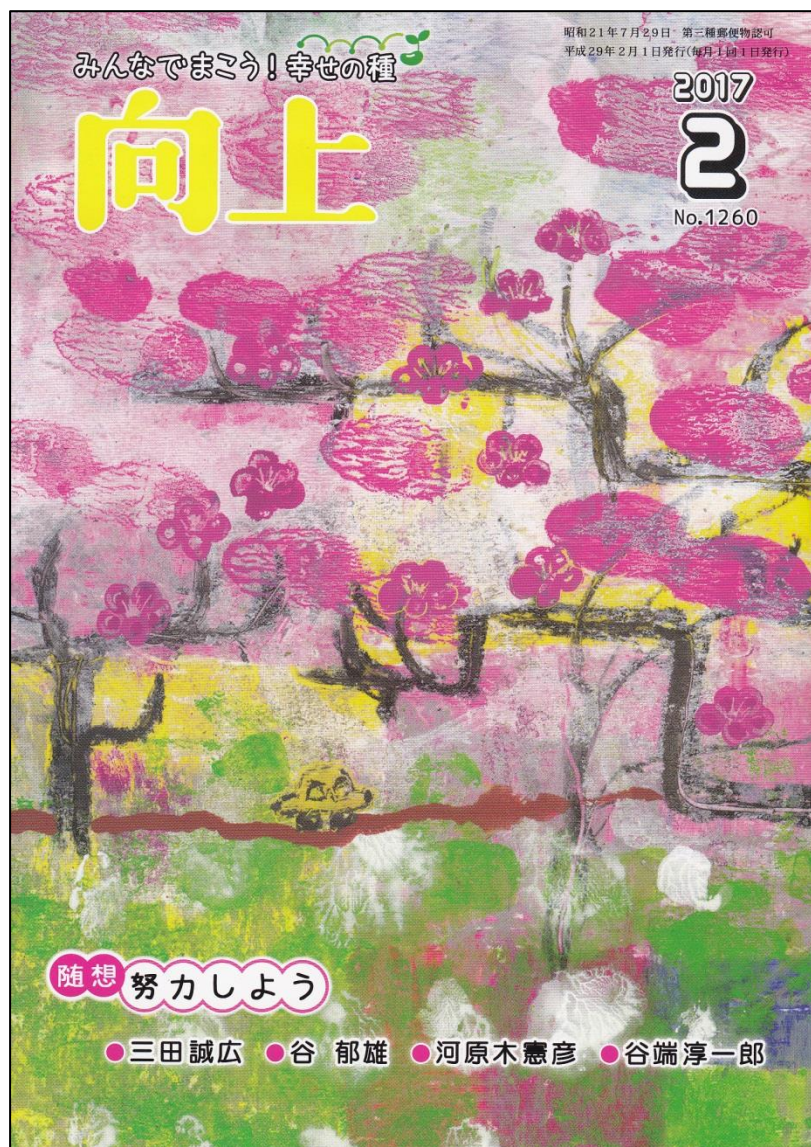
公益財団法人 修養団「向上 2月号」 に全麵協の活動が掲載されました！

一般社団法人 全麵協は“素人そば打ち段位認定事業”を基幹事業として、そばによる「仲間づくり」「地域づくり」「自分づくり」を目的に掲げて活動しています。

一昨年に一般社団法人化したことに伴い、私たちの活動をより社会的に広げようと関係団体との連携を進めてきました。その一つに、「社会教育団体振興協議会」への入会があります(平成28年6月30日 入会)。この協議会は「全国公民館連合会」に事務局を置き、法人化された全国組織で社会教育活動を行っている39団体が加盟しています。

“公益財団法人 修養団”は当協議会に加盟している中心的な団体で、社会教育家の蓮沼門三氏によって明治39年に設立されました。非常に永い歴史を持つとともに、主に青少年の健全育成を目的とした活動を行っている団体として社会的にも良く知られています。全国に20連合会、129クラブを持ち、会員13,800名(平成26年現在)を擁して、年間予算約7億円で活動しています(修養団 <http://www.syd.or.jp/>)。

昨年末に、公益財団法人 修養団が青少年向けに発行している月刊誌「向上 2月号」掲載の「随想・努力しよう」に、全麵協に対して執筆依頼がありました。「向上」には初めての掲載であり、全麵協の紹介を含めて6ページ執筆しました。当誌が発行されましたので、その掲載内容をご報告いたします。【 段位認定事業部・段位認定部会長 谷端淳一郎 】



随想 努力しよう そば打ちは「つなぎ」が大切

一般社団法人 全麵協 段位認定部会長 谷端淳一郎

●全麵協のご紹介

一般社団法人 全麵協の前身「全国麵類文化地域間交流推進協議会」は、平成五年十一月に設立されました。全麵協の基幹事業である「素人そば打ち段位認定制度」は平成九年に事業化され、今年度は二十周年を迎えました。「そば打ち段位」は初段位から五段位までありますが、全国各地で段位認定会が開催されて、現在、約一万三千人が段位認定されています。

「そば打ち」は中高年の男性中心のように思われていますが、最近は女性や若い人、「高校そば打ち選手権」が開催され始めたこともあって、高校生の段位認定者が増えています。私たち全麵協は「そば打ち」を単なる趣味の域に留めることなく、「そばで人と人をつなぎ地域を元氣する」ことを目的に掲げて、全国各地で様々な活動を行っています。

「そば打ち段位」は、そば打ち技能だけでなく、そばに関する知識や経験、そばによる地域貢献度が審査されて「段位」が認定されます。「そば打ち段位」認定を目指し、さらに「上位段」に認定されるまでには相当な期間と、不断の努力が求められます。努力なくして「そば打ち段位」認定は得られませんが、そば打ちとそば打ち段位の「魅力」の中に、辛い努力を大きな喜びに代えるヒントが隠されているように思っています。

●全麵協のルーツ

全麵協は富山県東礪波郡利賀村(現・南砺市利賀村)で平成四年に開催された、「世界そば博覧会 ㊦ 利賀」の成果として誕生しました。利賀村は平家の落人伝説が残る、合掌造りで有名な五箇山地域の一つです。急峻な山々に囲まれたこの地域は、冬期に三メートルを超す豪雪に覆われ、以前は冬期を迎えると外部との交通が途絶えてしまいました。しかし、世界遺産に登録されている合掌家屋をはじめ、「こきりこ節」や「麦屋節」などの民謡、山菜料理やそばなど独自で豊かな山村文化が育っている地域でもあります。

昭和二十年に五千人弱を数えた人口は、高度経済成長期を迎えるころから急速に減少し、昭和四十年には二千五百人と半減しました。利賀村は危機感を抱いて、さまざまな「地域活性化」の取組みを果敢に行いました。「村営バスの運行」「合掌文化村構想の実施」「武蔵野市との姉妹都市交流」「合掌造り家屋の貸出し」……ユニークな取組みは、次第にマスコミでも取り上げられるようになりました。

●努力は必ず報われる

昭和五十一年二月に豪雪の中を、早稲田小劇場主宰の鈴木忠志氏が利賀村を訪れました。鈴木氏は「重厚な合掌造りは演劇創造の理想空間」と大そう気に入り、東京から利賀村へと本拠地を移動させました。昭和五十七年に「第一回世界演劇祭in富山」を開催して、アメリカ、イギリス、ポーランド、インド、ブータン、日本から十二劇団が参加し、国内外から一万三千人もの観客が訪れました。人口千二百人の利賀村に、国際的な賑わい空間が出現したのです。この「世界演劇祭」は大成功を収めて、村民に大きな満足感と自信を与えました。「世界は日本だけではない。日本は東京だけではない。この利賀村で世界に出会う。」これは、世界演劇祭のスローガンであるとともに、以後の地域活性化の基本的な姿勢となりました。

自信を得た利賀村は昭和六十一年二月に、冬の富山県を代表するイベントとなった「利賀そば祭り」の開催を開始しました。さらに、そば料理の提供と山村文化を発信させようと、「そばの郷」建設構想を立案、「そば博士」の氏原暉男信州大学教授に指導を仰ぎました。

氏原教授から、そばも「世界」に係わる食文化であると知らされ、昭和六十四年一月に村長以下十八名で好調査団を組織して、そばの源流を求めてネパール・ツクチェ村へと向かいました。

ツクチェ村の訪問は、そばに関する資料の収集、友好村の調印など大きな成果をあげました。同年秋に三名の絵師がネパールから利賀村に来村、一年半滞在して友好を記念する四メートル四方の「寂靜四十二尊曼荼羅」「忿怒五十八尊曼荼羅」「極楽浄土図」「十一面千手観音像」を描き上げました。四枚の曼荼羅は目を見張る大作で、学術的にも極めて貴重なものであり「瞑想の郷」展示館に今も掲げられています。

●集大成として「世界そば博覧会」を開催

利賀村の四半世紀にわたる「地域活性化」事業の集大成として、村民をあげて開催したのが「世界そば博覧会in利賀」です。「そばの世界-その広がりとの出会い-」をテーマに掲げて、世界十五ヶ国、国内三十八市町村の参加を得て、平成四年夏に一ヶ月間にわたって開催されました。メイン会場は、日本と世界のそば情報を展示した「世界そば博テーマ館」、人と自然の調和をうたう「武蔵野姉妹館」、世界のそば料理約四十種類を提供する「世界そばグルメ館」、一流の職人技を披露する「そば打ち名人館」、「世界のバザール」、ネパールのラマダンス、全国ふるさと伝統芸能などが競演する「野外ステージ」等の構成です。

「世界そば博覧会in利賀」は十三万六千五百三十人を集客し、日本イベント大賞「最優秀企画賞」と「大衆話題賞」をダブル受賞しました。利賀村はこの成功を全国自治体の支援協力のお陰ととらえて、平成五年に地域振興を相互扶助する組織として「全麵協」を結成したのです。

●「はち」でつながる「そば」

利賀村では、相互扶助を行う「結」という制度があります。合掌家屋の葺き替えなどは一つの家族ではできないので、相互扶助の「結」によって助け合うのです。この精神は利賀村が行った「地域活性化」の取り組みでも生かされ、村外との「交流」を何よりも大切にしました。外との交流によって小さな村の中で成し得なかった企画を発想し、大きな挑戦を実現させることができたのです。利賀村における「地域活性化」の原動力は、突きつめれば「人の力」であり、「交流の力」でした。そのため、利賀村で誕生した全麵協の前身である「全国麺類文化地域間交流推進協議会」の中にあつた、「交流」に込められた願いを忘れてはならないと思っています。

そば打ちには「一はち、二のし、三包丁」という言葉があります。「はち」とは木鉢で行う作業を指し、そば粉とつなぎ粉(小麦粉)、水を混ぜて練り合わせる工程です。そば打ちはこの木鉢で行う工程が最も重要で、さらさらした「そば粉」を、つるつるとした「麵」へと変える大切な作業です。「はち」で行う作業は、まるでバラバラな人間を「交流」によって一つにつなげて行くようです。最初は難しくて苦勞するそば打ちですが、全麵協では「仲間づくり」を大切にしています。有段者がやさしく親切に指導しますので、楽しく練習することができるのです。さらに、「地域づくり」活動で学校や公民館、福祉施設などでそばを提供することで感謝されて、大きな喜びと励みを得ます。より大きな喜びを目指して、一生懸命にそば打ちの練習に励むこととなります。これらの積み重ねが、自然に「段位認定」へと導いて行くのです。

人とのつながりによって目標に挑戦する気力が生まれ、努力することが励みとなってさらに多くの人々とつながって行く。そば打ちは「つなぎ」が大切なのです。そのことを、利賀村の営みとそば打ちから学ぶことができます。